

## 一語からの発想

桑原 正紀

三月号のシリウス特選欄に次のような歌があった。

小鳥遊たかなしといふ姓かばねあり鷹などの飛ばぬしづけき山村の空

河北 笑子

「小鳥遊」は難読姓のひとつで、和歌山県的那智勝浦町に数戸存在するという。もともと「高梨」という表記であったらしいが、「たかなし」という音から「鷹無し」を連想し、天敵の鷹がいないので小鳥がのどかに遊んでいるイメージの「小鳥遊」を当てたのだろうと言われている。何とも豊かな遊び心に満ちたエピソードが楽しい。

それはさておき、ここで取り上げたいことは、作者河北さんがまず「小鳥遊」というおもしろい姓に出会って、作品化してみようと思った動機についてである。

このように、言葉そのものの魅力から入り、一首を仕上げていくということはよくあることだ。高野公彦さんの机の引き出しには、折々出会ったおもしろい言葉や、詩想を誘われた言葉のメモが詰まっているという（一度のぞいて

みたい）。高野さんの歌をそういう観点から見ると、ああこの歌はその言葉を核にして結晶した一首だろうな、という作品によく出会う。

地下五寸そのくらがりにねむりみて観天望気する冬の

亀

『天泣』

この歌の「観天望気」も引き出しに長く眠っていたものかもしれない。高野さんのこの作り方で何といつてもすごいのは、般若心経の一字一字を頭に据えた歌だけでまとめた『青き湖心』である。漢字のたつた一字から拡げられた世界の何とゆたかなことか。

小鳥ゆかりさんにも同様の作り方を感じさせる歌があるが、圧巻は『折からの雨』に収められている、雨と風をテーマとした作品群であろう。

山賊雨さんぞうあめどやどやと来て駅前さきまの自転車じてんしゃをなぎ倒して去りぬ

ゆく秋あきの浚さらひのかせ風はわが母のこゑを攫さらへり山茶花あかし  
日本語には何百という種類の雨、風を言い分ける言葉があるらしいが、それを実感をこめて作品化しているところはさすがである。

たった一語から発想をふくらまし、一首に仕上げることが容易ではない、豊かな想像力と技量が要求される。逆に言えば、それを養うために挑戦すると言うこともできるのではないか。皆さんにもぜひお勧めしたい方法である。